校名：長崎大学教育学部附属特別支援学校

所在地：〒８５２−８０４６
長崎市柳谷町４２−１　電話番号：０９５−８４５−５６４６

記載日：平成２８年５月１２日　　記載者：佐藤凡人　　記載者役職：校長

本校の校風及び特色

＜教育目標＞

個々の児童生徒の教育的ニーズに応じた教育を行い、一人ひとりの自己教育力を高めながら可能性を最大限に伸ばし、自立的な生活を送り、積極的に社会生活に参加できる人間の育成を目指す。

＜目指す児童生徒像＞

１　生きる喜びをつくる

自立と社会参加を目指すには、いろいろな生活体験を通して生きる喜びを抱くことが大切である。児童生徒は知的好奇心や興味・関心を抱き、課題に対して自ら考えて主体的に行動する経験を通して成就感や喜びを味わうことができる。そして、それを原動力にして意欲的な生活を送り、自己実現に向けて精一杯取り組んでほしい。

２　生きる力を身につける

自立と社会参加を目指すには、個々の特性と発達に即した生きる力が必要である。

自己を育み、自分のよさやできることを発揮するために必要な態度及び知識・技能を身につけてほしい。

さらに、社会の一員として自分にあった進路を自己選択・自己決定し、生き生きと働いたり余暇を楽しんだりして、生活を充実し、豊かなものにしてほしい。

卒業生の状況

＜過去１０年間の進路先＞

高等部卒業生数７８名

就職：１２名、施設入所：２名、通所福祉サービス：５９名、職業訓練校：５名

＜同窓会活動及びアフターケア＞

毎月１回、日曜日に卒業生が集まり、学校でソフトボールの練習や試合を実施している。その際に参加者やその場にいない卒業生の情報を収集するようにしている。

また、同窓会（名称：卒業生進路ガイダンス）を毎年８月に開催し、卒業生同士の情報交換や学校側からのアフターケアを実施している。

特色ある活動

＜大学と連携した研究＞

本校生徒を事例として取り上げ、大学院生と本校の担当者が連携を図りながらテーマを決めて研究に取り組んでいる。大学と連携して行うことで、質が高く専門的な研究となっており、研究成果も上がっている。27年度は７つの共同研究に取り組んだ。

例

「ダウン症児の構音に関する指導と考察」

・構音の指導を継続して発音の改善を行う。

・他者とのコミュニケーション手段として言語を積極的に使用できることを目的とし、発話意欲の向上及び改善を目指す。

＜保護者と学校が連携した取組＞

児童生徒に「生きる力」をつけさせるために、保護者が主体となって学部ごとにテーマを決め、学校と連携を図りながら取り組んでいる。その取組の成果を第６５回九附連宮崎大会の中で発表した。

１　小学部

テーマ「自力登下校」

～登下校を通して自立への一歩を踏み出そう～

自力登校が難しい児童に、保護者が毎朝同伴し、支援を行いながら自力登校を促している。課題等がある場合には、担任と検討し改善策を講じながら実践を継続している。

２　中学部

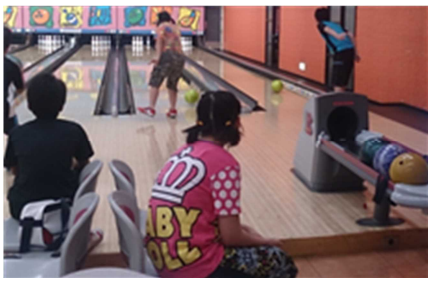
テーマ「買い物をしよう」

～買い物を通して社会性を身につけよう～

将来自立して生活を送るためには、買い物は身近で必要な行為である。そのため、自分で「選択する力・判断する力・行動する力」をつけさせるために買い物の場面を設定して取り組んでいる。

３　高等部

テーマ「卒業後も続けられる関わりを目指して」



卒業後も続けられる関係作りを目指して、余暇活動を通しての仲間作りに取り組んでいる。ボウリングやカラオケ、ウインナー作りなどの活動を仲間と一緒に体験しながら関係を深めていっている。

＜ボランティア養成講座の開設＞

学生（約２４０名）が参加する「参加観察実習」の中に、「ボランティア養成講座」を組み込み、本校の保護者から体験談を聞く機会を設定している。障害がある子どもを育てることを通して、子どもの出産時から現在に至るまでの養育について保護者から直接話を聞くことで、障害者理解や共生社会を構築する上でどのような課題があるのかを考える機会となっている。

地域においての存在

〇地域のセンター的な立場にある。

・教育相談において、昨年は約８０件の相談件数があった。主に、就学前児童、小学生が対象である。児童生徒の保護者、地域の小学校教諭からの相談に対して、丁寧に対応することにより、相談件数も年々増えている。また、１１月に実施する「のびのび教室相談会」では、長崎大学の方から心理学の先生方に来ていただき保護者からの相談に対応してもらっている。

のびのび教室相談会の様子（１１月）

・研修の場として、夏季休業中に公開セミナーを開催して、発達障害に関する内容を取り上げている。地域の障害児の養育や教育支援に関わる方々の参加が増えていき、　一昨年より400名前後の方が参加されるようになった。

附属学校の存在意義

〇本校の附属特別支援学校の使命として、研究と教育実習があり、それが大きな存在意義であると考える。

研究については、2年に1回、必ず公開研究発表会を開催している。本校の教員は県立の特別支援学校から転勤した者が殆どであるので、県内の特別支援学校がもつ研究課題を理解したうえで、県内の先生方の興味関心に応え、日々の実践の一助となるような研究に取り組んでいる。２７年度の公開研究発表会では、100名を超える参加者があり、アンケートの結果からも、分かりやすい研究内容であったという回答が７割以上であった。

公開研究発表会（２８年２月）

教育実習では、主免実習生が15名、副免実習生が60～70名ほど、毎年受け入れている。特に、近年副免実習生の希望者が増えており、特別支援教育の関心の高さを強く感じている。実習内容としては、授業の経験だけでなく、クラス担任の経験、連絡帳を書く経験などをとおして、保護者との対応についても学ぶことができる。実習生にやる気をもたせて実習に取り組ませることを大切にしており、実習終了後のアンケートでは、殆どの者が教師を目指したいと答えている。